

高井田遺跡・本郷遺跡

—1989年度公共事業に伴う—

1990年3月

柏原市教育委員会

はしがき

好景気の波にささえられ、本市においても大小の開発計画が後を絶ちませんが、市域の大部分が埋蔵文化財包蔵地である本市においては、工事に伴う発掘調査が欠かせないものとなっています。発掘調査によって、郷土の歴史を復元し、郷土への关心や理解を深め、未来への指針とするためにも、埋蔵文化財の調査は必要なものです。一度破壊された埋蔵文化財は、二度と甦ることはありません。それを現代に生きる私たちが、私たちの判断で破壊してしまう場合には、十分な調査が必要になります。そして、私たちには、可能な限り、これらの埋蔵文化財を文化遺産として、現状のまま後世に残していく義務があることを御理解いただきたいと思います。

本市においては、本年度も市民の生活環境を向上させるために必要な各種の公共事業が実施されました。その中から、本書で報告するものは、プール駐車場建設と福祉センター建設事業に伴うものであり、いずれも事前に発掘調査を実施し、多くの成果がありました。また、プール駐車場建設においては、発見された遺構の大半を保存することができました。調査の実施、また保存に際しての関係各機関、地元の方々の御協力に感謝の意を表します。今後とも、埋蔵文化財への御理解と御協力をお願いします。

平成2年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、平成元年度の公共事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、高井田遺跡（高井田廃寺1989-1次調査）と本郷遺跡（本郷遺跡1989-2次調査）の緊急発掘調査報告である。高井田廃寺1989-1次調査は、高井田廃寺（鳥坂寺跡）、高井田遺跡における国民年金健康保養センター・サンヒル柏原のプール用駐車場建設工事に先立つ調査である。調査結果から、高井田廃寺の寺域内とは考えられないため、高井田遺跡として報告する。また、本郷遺跡1989-2次調査は、柏原市福祉センターの建て替え工事に先立つ調査である。

2. 高井田遺跡（高井田廃寺1989-1次調査）

調査依頼者 柏原市土地開発公社（理事長・柏原市長 山西敏一）

調査地所在地 柏原市高井田146番3外

調査対象面積 950m²

調査面積 140m²

調査期間 試掘調査 昭和63年11月17日～12月1日

発掘調査 平成元年6月28日～7月21日

3. 本郷遺跡（本郷遺跡1989-2次調査）

調査依頼者 柏原市長 山西敏一

調査地所在地 柏原市本郷3丁目741-1外3筆

調査対象面積 1,348m²

調査面積 200m²

調査期間 平成元年9月18日～21日

4. 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課文化係 安村俊史が担当した。

5. 高井田遺跡の調査に際して、大阪府教育委員会文化財保護課久米雅雄氏より、指導、助言をいただいた。

6. 本書の編集、執筆は安村が担当した。

7. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。

目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 高井田遺跡	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査成果	5
3. まとめ	13
第3章 本郷遺跡	15
1. 調査に至る経過	15
2. 既往の調査	16
3. 調査成果	17
4. まとめ	19

挿 図 目 次

図-1 調査地周辺の遺跡分布図	1
図-2 調査地位置図	4
図-3 調査区位置図	5
図-4 第1~3トレンチ遺構図	7
図-5 第1区遺構図	8
図-6 第2区遺構図	9
図-7 出土遺物	13
図-8 出土遺物	14
図-9 調査地位置図	16
図-10 調査区位置図	17
図-11 西壁上層図	18
図-12 出土遺物	19

図 版 目 次

- 図版1 高井田遺跡・第1トレンチ 全景、上段遺構
- 図版2 高井田遺跡・第1トレンチ 下段遺構、下段土層
- 図版3 高井田遺跡・第2トレンチ 全景
- 図版4 高井田遺跡・第3トレンチ 全景、上層
- 図版5 高井田遺跡・第1区 全景
- 図版6 高井田遺跡・第1区 溝—1、2
- 図版7 高井田遺跡・第2区 全景、石積み遺構
- 図版8 高井田遺跡・第2区 石積み遺構
- 図版9 高井田遺跡・第2区 石積み遺構細部
- 図版10 高井田遺跡・第2区 下層遺構
- 図版11 高井田遺跡・第2区 下層遺構、ピット—20
- 図版12 高井田遺跡・第2区 溝—5
- 図版13 高井田遺跡・遺物
- 図版14 本郷遺跡 上層全景
- 図版15 本郷遺跡 中層全景
- 図版16 本郷遺跡 下層全景、下層北壁

第1章 位置と環境

平成元年度も、柏原市公共事業関連の調査を数件実施したが、その中から、本書では高井田遺跡（高井田廃寺1989－1次調査）と本郷遺跡（本郷遺跡1989－2次調査）の2件の調査概要を報告する。両調査地の位置は図-1に示す通りである。



図-1 調査地周辺の遺跡分布図

現在、柏原市域を南北に分断する大和川は、宝永年間（18世紀初頭）に付け替えられたものであり、それ以前は市役所前から北または北西に流れていた。旧大和川は数本の川に分かれ、洪水のたびに流路を変えるような暴れ川であったようである。現在の恩智川と平野川に挟まれた範囲が主な流路と考えられ、それより東側、および西側では、南北に遺跡が残っている。この旧流路と推定される範囲にも遺跡が存在する可能性はあるのだが、數十回におよぶ試掘調査の結果では、重機によって掘削可能な地表下2～3mまでは砂層ばかりであり、遺物、遺構は認められていない。しかし、更に深い部分に遺跡が存在することも考えられるであろう。

高井田遺跡は大和川の右岸に位置し、西向きの斜面に営まれた6世紀後葉～8世紀を中心とした集落遺跡である。集落は斜面をひな段状に造成して形成されており、かなり大規模な集落である。遺跡の南西に位置する高井田庵寺は7世紀前葉～中葉に建立されたと考えられる古代寺院であり、過去に塔、金堂、講堂、僧房などが調査されている。高井田遺跡は、この高井田庵寺を建立したと考えられる鳥取氏の居住地と推定されるものである。

今回の調査地は講堂の北40mに位置し、文化財分布図などでは高井田庵寺の寺域に含まれると予想されていた地区である。しかし、寺院に関連する遺物、遺構は認められなかった。調査地の南側で2m近い比高差を有する部分があり、人工的な地形と考えられるため、この部分が寺域の北端ではないかと予想される。また、寺域を画する回廊や築地塀などが存在するならば、過去の調査で検出されているはずなのだが、全く認められない。削平された可能性も考えられるが寺域内に谷が存在するような地形から考えると、寺域を画する施設がなかったか、あっても小規模なものであったと考えられる。

本郷遺跡は旧大和川の左岸に位置し、南には著名な船橋遺跡が存在する。船橋遺跡に比べると、立地条件は劣っており、洪水による被害は大きかったようである。縄文時代以来、近世までに3mの厚さの土砂が堆積している部分もあり、砂、シルト、粘土からなる複雑な地層は、大和川の氾濫の激しさを示している。たび重なる氾濫の間隙をぬって、小規模ながらも集落が続いている状況から考えると、船橋遺跡の分村的な性格を有していたのではないかと考えられる。

今回の調査地は平野川が北から西へと屈曲する部分に位置し、本郷遺跡の北東端に位置する。平野川より北は八尾市であり、八尾市との市境にもあたる。調査では、大規模な洪水跡が確認されており、旧地形の復元に好資料となるであろう。本郷遺跡は、このような地道な調査によって、その範囲、性格を明らかにしていかねばならない遺跡である。

第2章 高井田遺跡

1. 調査に至る経過

1988年10月に、柏原市土地開発公社（理事長・柏原市長 山西敏一）より、国民年金健康保養センターサンヒル柏原の西側に、サンヒル柏原のプール用駐車場を造成したい旨の連絡があり、柏原市教育委員会との間で協議を進めた。当該地の現状は、二段のぶどう畑であり、遺跡分布図では高井田廬寺（鳥坂寺跡）に含まれ、寺院関係の遺構が存在する可能性が考えられた。当該地のすぐ南には、1962年度に調査された鳥坂寺の講堂跡が位置する。金堂跡も良好な状態で残っており、柏原市教育委員会では、塔跡と共に、将来、史跡指定、整備等の案もある地域であるため、大阪府教育委員会文化財保護課の指導を仰ぎ、とりあえず試掘調査を実施し、その結果を基に、駐車場造成計画について検討を進めていくことになった。また、サンヒル柏原の建築に伴う発掘調査では、飛鳥、奈良時代を中心とした掘立柱建物が109棟検出されており、寺院関係の遺構が存在しない場合でも、飛鳥、奈良時代の集落遺跡が存在することは、十分に予想された。

試掘調査は、11月17日から21日にかけて、3箇所にトレーナーを設定し、合計約40m²の調査を実施した。その結果、掘立柱柱穴29、溝5などを検出し、遺物包含層も比較的良好な状態で遺存していることを確認した。特に、道路に面したぶどう畑上段に遺構が多いことが確認された。出土遺物は、須恵器、土師器、瓦などコンテナ6箱分であった。サンヒル柏原と同様に、飛鳥、奈良時代の集落遺跡が存在することが確認され、鳥坂寺に直接関連する遺構は確認されなかつた。

調査中、柏原市土地開発公社より、当初はコンクリート擁壁による構造物を計画していたが、松杭、松矢板による簡易な土留めを設置するのみで、現状を大幅に変更せずに駐車場を造成したい旨の連絡があった。この計画を受けて、11月28日、大阪府教育委員会文化財保護課久米雅雄氏に調査結果を視察していただき、現地で今後の対応について協議した。その結果、工事に先立って十分な調査を実施し、遺構保存について計画変更等を考慮する。構造物の設置を伴わないならば、景観等においても、問題ないであろうとの結論に達した。

その後、11月29日から12月1日まで埋め戻しを実施し、試掘調査を終了した。

しかし、駐車場造成工事に伴う費用、範囲、工法等について結論が出ないままに時間が経過し、1989年6月に至って、ようやく柏原市土地開発公社より、計画がまとまっていたので協議したいとの連絡が入り、6月16日に、柏原市土地開発公社、柏原市土木課、柏原市教育委員会社会教育課の三者で協議を行った。その席で、今夏のプール利用者のために、できるだけ早く駐車場を造成したい。そのため、至急に発掘調査に着手して欲しい旨の要望が、土地開発公社より

出され、協議の結果、切土予定地を対象に調査を実施する。調査は6月末頃に着手する。至急文化財保護法57条の3に基づく通知を提出するとの結論に達した。

その後、6月22日付で発掘通知書が提出され、6月28日より発掘調査に着手した。通知にやや遅れて提出された計画設計図に基づいて、北端の進入路予定地については全域調査、駐車場予定地の東端については最大80cmの切土が予定されており、この部分に幅4m、長さ20mの調査区を設定し、調査を実施することにした。前者を第1区、後者を第2区とする。その他の区域では20cm以下の切土、もしくは盛土であり、試掘調査の結果から、埋蔵文化財に影響がないと判断できるため、調査は実施していない。

調査の結果、第1区では中世の細い溝が2本検出されたのみであったが、第2区では中世の石積み基壇かと考えられる遺構が検出され、飛鳥・奈良時代の掘立柱穴18、溝3などが検出された。しかし、第2区の遺構面が計画地盤高よりも約10cm高いため、保存を要望し、設計変更を求めた。その後、7月19日に土地開発公社、土木課、社会教育課の三者で正式に協議を実施し、駐車場地盤高を計画より30cm高くし、遺構を盛土下に保存することで合意に達した。その結果、遺構面は最低20cm以上の盛土下に保存できることになり、遺構の保存が可能となったため、埋め戻し後、7月21日に調査を終了した。

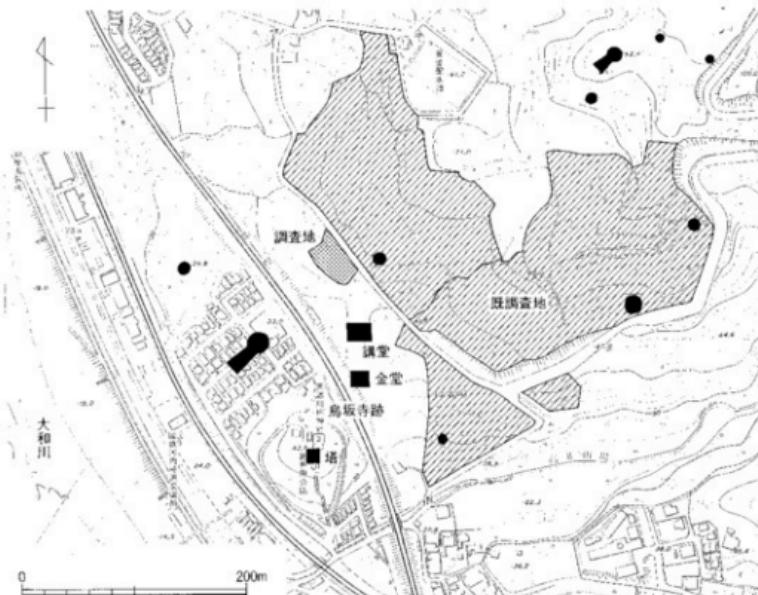


図-2 調査位置図

2. 調査成果

概要

調査地は、大和川を見下ろす南西斜面に位置し、調査前は、ぶどう畑であった。ぶどう畑は二段になり、北東側は農道建設時に大きく削平されている。道路を隔てた北東側には、1987～1988年にかけて発掘調査を実施した国民年金健康保養センター・サンビル柏原が位置する。

調査は試掘調査を経て、工事によって影響がある部分のみ、発掘調査を実施した。試掘調査で設定した3箇所のトレーニチを、それぞれ第1～3トレーニチ、発掘調査で設定した2箇所の調査区を、それぞれ第1・2区とした。

試掘調査によって検出した遺構は、上面を確認したのみであり、遺構埋土の掘削は行っていない。また、協議によって保存が可能となった第2区の遺構の中で、掘立柱柱穴と考えられるピット（図中では略号Pを使用）も、柱部分を掘削したのみで、掘方は掘削していない。同様に、石積み遺構保存のため、遺物包含層の一部も掘削していない。

以下、遺構、遺物の順に概略を報告する。

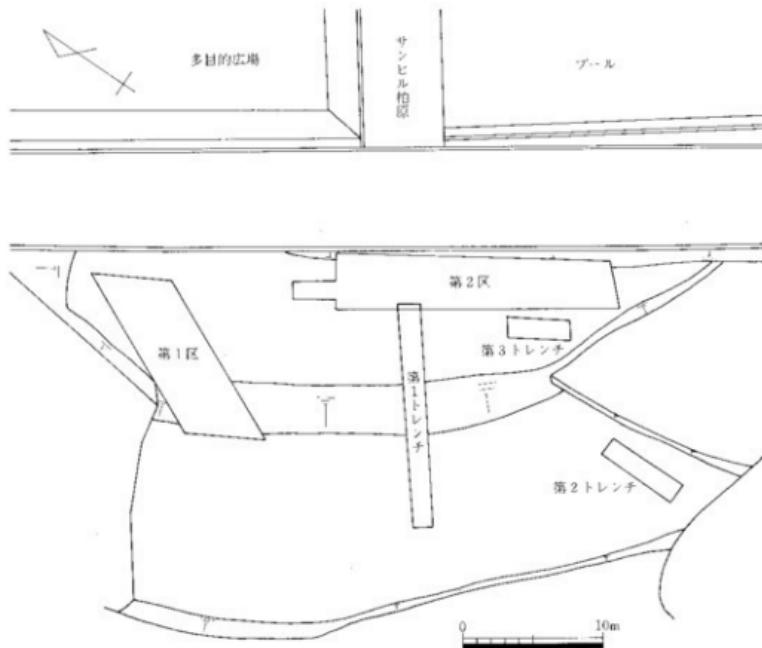


図-3 調査区位置図

遺構

第1トレーナー 二段のぶどう畠を横断するように設定した幅1.5m、長さ16mのトレーナーである。埋土は、盛土、耕作土、床土下に中世の遺物包含層である第4層灰褐色粘質土が、ほぼ全面に堆積する。暗黄褐色粘質土の地山は西端で緩やかに傾斜し、第5～7層の飛鳥、奈良時代の遺物包含層が堆積する。遺構は、上段にピット15、溝2、下段にピット5、溝1がみられる。小規模なピットや溝は中世、大規模なピットは飛鳥、奈良時代の遺構と考えられる。第1トレーナーの状況から、ぶどう畠の段は飛鳥、奈良時代に既に造成されたものであり、中世にもこの段が利用されていた。その後、水田耕作に伴って、一部改變され、現在のぶどう畠に至っていると考えられる。

上段から軒丸瓦の中房（15）、瓦器椀（11）、下段の包含層から土師器の小形高杯（9）が出土している。

第2トレーナー ぶどう畠下段の南端に設定した幅1.5m、長さ6mのトレーナーである。遺構は地山面で、小規模なピットを5個検出した。少量の土師器、須恵器が出土しているのみで、顯著な遺物は認められない。

第3トレーナー ぶどう畠上段の南端に設定した幅1.5m、長さ4.5mのトレーナーである。地山は南側へ緩やかに傾斜しており、北半でピット3、南半で溝3を検出している。埋土は中世の包含層である第4層灰褐色粘質土の下に、飛鳥、奈良時代の包含層である第5層黒褐色粘質土と第6層淡黒褐色粘質土が堆積する。層序から、3条の溝が奈良時代以前であることが確認できる。

第5、6層から、須恵器壺（5）、土師器杯（7）、平瓦（17、20、25）が出土している。第5、6層は、比較的の遺物量が多い。

第1区 ぶどう畠上段に設定した幅4.5m、長さ13mの調査区である。地山は南西へ緩やかに傾斜する。地山上には中世の包含層である灰褐色粘質土が厚く堆積するが遺物の量は少ない。遺構は2条の溝が確認されたのみである。溝1は幅60cm、長さ5.4mまで確認できている。深さは5cm程度を残すにすぎず、底面の比高差はほとんどみられない。溝2は幅50cm、長さは6m以上。深さは10cm以下であり、南側で二又に分かれている。やはり、底面の比高差はみられない。どちらも、等高線に平行するように掘られており、約1.2mの間隔ではほぼ平行する。埋土は灰色粘質土、溝2から、少量の土師器、瓦器が出土しており、中世の溝であることが確認できる。

灰褐色粘質土から須恵器杯身（3）、瓦器皿（12、13）、平瓦（18、19）などが出土している。灰褐色粘質土には飛鳥、奈良時代の遺物も含まれているが、その時期の遺構は全く検出されていない。

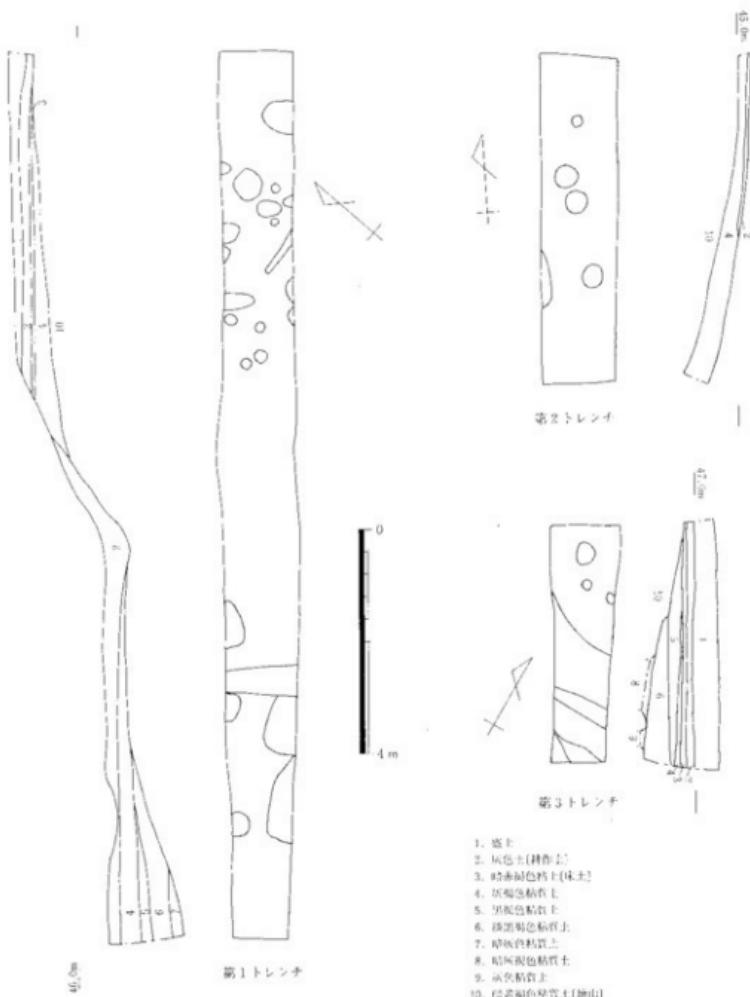


図-4 第1～3トレンチ遺構図

1. 直土
2. 黄色土[耕作土]
3. 時季褐色粘土[灰土]
4. 低地全耕土
5. 黑色全耕土
6. 低地褐色粘土
7. 低地全耕土
8. 岩岡褐色粘質土
9. 灰色黏質土
10. はく褐色発育土[堆山]

第2区 ぶとう畑上段の南東部に設定した幅4m、長さ20mの調査区である。地山面は浅く、地表下0~50cmで暗黄褐色、暗赤褐色粘質土の地山に至る。地山上には飛鳥、奈良時代の包含層である第3層黒褐色粘質土が堆積し、その上層に中世の包含層である第2層暗黄褐色粘質土が堆積する。調査区北半では包含層の堆積が認められない。

遺構はピット20、溝3が、いずれも地山面で検出された。また、北北西から南南東へのびる石積み遺構を検出している。

ピットは、直径10cm程度の円形平面のものや、一辺1m近くの方形平面のものがみられる。ピット-7の掘方上層からは重さ77gの三角形状の鉄滓が土師器片と共に出土している。また、ピット-10からは須恵器杯蓋片(1)が出土しており、7世紀初頭の時期と推定される。他のピットからも土師器、須恵器片が出土しているが、掘方を完掘していないため、遺物の量が少なく、時期を確定することができない。おそらく、包含層や周辺の状況から、大半のピットは飛鳥、奈良時代と考えられ、北半のピット-1、2、4、14などは、その大きさから中世と推定される。

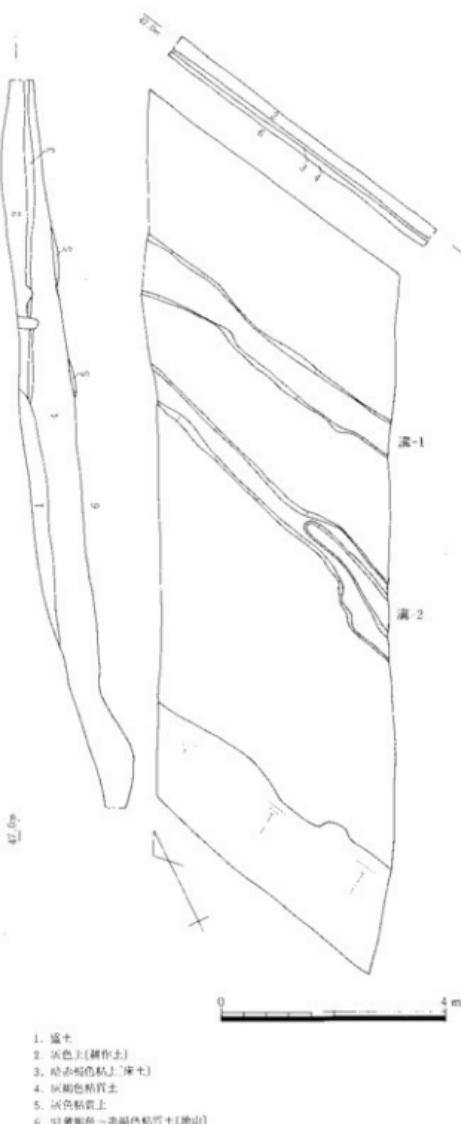


図-5 第1区遺構図



图-6 第2区遗骸图

溝は3条検出された。溝-3は幅70cm、長さ1.4m以上、溝-4は幅40cm、長さ2.1m以上である。どちらも、深さ10cm程度であり、溝-3は西へ、溝-4は南へ傾斜する。遺物は少量の土師器、須恵器片が出土しているが、時期は不明。溝-4は、ピット-13の上面に、わずかにその痕跡を残しており、ピット-13より新しいと考えられる。

溝-5は、幅3.4m以上を測り、南側の壁面は調査区外に位置する。第3トレンチで検出された溝に統くものである。深さは70cmを測り、東から西へと緩やかに下っている。埋土は上層から暗灰褐色粘質土、暗赤褐色粘質土、灰色粘質土、灰色砂質土、暗赤褐色粘質土である。飛鳥、奈良時代の包含層である黒褐色粘質土の堆積以前に、溝-5は埋まっていることが層位から確認できるが、溝下層の灰色砂質土からも奈良時代の瓦が出土しており、時期差は認められない。溝の北壁は途中で段をなし、肩部にはステップ状の遺構がみられる。おそらく、人工の溝であろう。溝内からは、須恵器杯蓋(2)、土師器杯(6)、形象埴輪(14)、重圓文軒丸瓦(16)、平瓦(21、23、24)、鉄滓が出土。鉄滓は5個出土しており、最大350g、総重量436gである。

石積み遺構は、第2区の西壁際で検出された。その西側を30~50cm掘り下げて整地し、掘り下げるこによって生じた段状の部分に築かれている。北端近くでは、この位置に長さ2m、幅1.6m、厚さ50cmの花崗岩の自然石がみられる、この自然石を基準に石積みを行っている。この自然石から南へ8.4mまで石積みが続き、約2mの空白をおいて、更に5.8m以上続いている。南端は調査区外へ続いている。石積みの下底面はT.P.46.7mではほぼ一定しており、基本的にはやや小形の石を小口積みにし、その上にやや大形の石を積んでいる。しかし、石積みが丁寧な部分と乱雑な部分がみられ、最下段に大形の石を使用している部分もみられる。また、直線状に積まれている部分と緩やかな弧を描く部分がみられ、全体で見ても、南へ向かうにつれて、徐々に東へ振っているようである。花崗岩の巨石の北側には石積みは続いておらず、花崗岩の北側約2mで、この段は東へ折れるようである。この地点を北端と考えると、南北長は20m以上となる。また、石積みの西側には、浅い溝状の遺構が残っている部分がある。石積み遺構の性格は明らかにできないが、基壇状の遺構ではないかと思われる。建物建築時の整地に伴って築かれたものであろう。その時期は、中世の包含層である暗黄褐色粘質土が石積みに伴う整地層と考えられることから、中世と考えられる。しかし、後世の削平のためか、この石積みに伴う建物は検出できなかった。

第2区では、暗黄褐色粘質土から須恵器杯身(4)、土師器(8)、高杯(10)、平瓦(22)が出土している。

第2区は、工事によって削平される予定であったが、石積み遺構などが検出されたため、保存についての協議を進め、盛土下に保存されることになった。関係各機関の御協力に感謝したい。

遺物

1～5は須恵器。1、2は杯蓋。1はピットー10から出土した口縁部の小片である。2は溝-5から出土しており、扁平なつまみを有するものと考えられる。3、4は杯身。3の底部外面には回転糸切り痕が残る。4は、高台を有する杯身である。5は甕の口縁部。体部外面には平行叩きがみられる。口縁部は回転ナデ調整。

6～10は土師器。6の杯は外面をナデと指頭押圧によって調整し、口縁部をヨコナデする。溝-5出土。7は小形の杯。口径10.2cmである。内外面ともに指頭によって調整する。8は小皿。口縁部ヨコナデ、体部はナデ調整。9は小形手づくねの高杯。杯部を欠損する。10は高杯。口縁は水平に近く外反し、端部でやや肥厚する。表面の磨滅が著しいが、口縁部はヨコナデ、杯部は内外面ともにナデ調整と思える。

11～13は瓦器。11は椀。内面にはヘラミガキがみられるが、表面磨滅のため、外面のヘラミガキは不明。12、13は浅い小皿。内外面ナデ、口縁部ヨコナデ。内面にラセン暗文がみられる。

14は形象埴輪。表面は緩やかな傾斜面をなす。表面には約1cmの高さの段がみられ、段に沿って綾杉文の線刻がみられる。表面、裏面ともにナデ調整。家形埴輪の一部か。

15～25は瓦。15・16は軒丸瓦の一部。15は軒丸瓦の中房である。直径約5cmの中房に、1+8の蓮子が方形に配されている。鳥坂寺出土の蓮華文軒丸瓦に、ごく一般的に認められる中房である。16は重閣文軒丸瓦の一部である。三重圓であり、各圓線の推定直径は、それぞれ3.4cm、6.7cm、9.5cmである。瓦当厚は2.3cm、瓦当裏面はナデ仕上げ、丸瓦部との接合は、放射状に指頭押圧を施している。外面は黒灰色、内面、断面は淡灰白色を呈する。高井田遺跡からは、過去に一重圓文軒丸瓦が1点出土しており、やや數値が異なるが、焼成等が類似するため同型の可能性がある。（柏原市教育委員会『高井田遺跡III』1989）

17は平瓦。小片のため判然としないが、撲紐による分割界線と考えられる痕跡が凹面に残されている。凸面は叩き痕をナデ消している。（瀧本正志「半瓦桶巻作りにおける一考察」『考古学雑誌』第69卷2号、1983）

18は凸面に平行線に数本の斜線が入る叩き目を有する。側縁は分割破面、および凹面を面取り状にヘラケズリする。19は凸面に菱形を斜線で幾つかの多角形に分けた叩き目を有する。側縁は18と同様の調整を行うが、一部に分割破面が残る。20は凹面に平行する数条の弧線からなる叩き目を有する。側縁全体をヘラケズリする。21は凸面に綾杉と平行線を組み合せた叩き目を有する。22は凸面に木の葉状と平行する数条の弧線からなる叩き目を併用したと考えられる叩き目を有する。やはり側縁は凹凸両側にヘラケズリを施す。それぞれ、鳥坂寺の叩き日の分類によるC-3類、D-3類、D-7類、D-10類、F-9類に対応すると考えられる。（大阪府教育委員会『河内高井田・鳥坂寺跡』1968）

23～25は襷叩き目を有する。17～23は桶巻作り、24、25は一枚作りと考えられる。

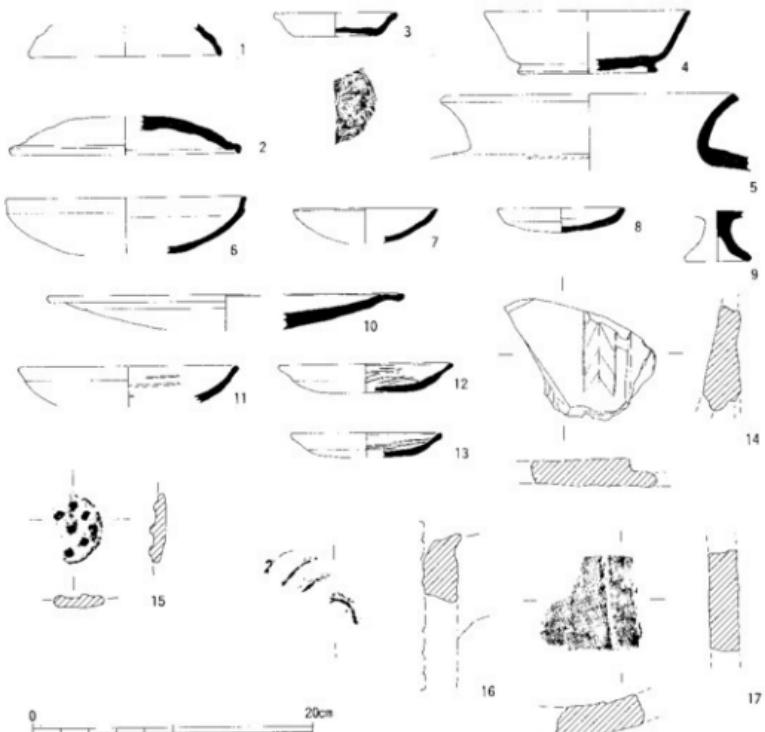


図-7 出土遺物

3、まとめ

今回の調査結果から、調査地が鳥坂寺（高井田庵寺）寺域内に含まれていないことが確認できた。おそらく、調査地の南側で2m近くの比高差で低くなっている部分までが寺域ではないかと推定される。一方で、高井田遺跡が更に西側へ続いていることが確認された。調査地の西側にはひな段状のぶとう畑が続いており、遺跡の西端は現状では確認できない。

また、中世においても石積み遺構が検出され、想像以上に集落が大きかったことも考えられる。中世の遺物、遺構は、削平のため遺存状態が悪く、今回の石積み遺構検出は大きな意義があったと言える。

今回の調査によって検出された遺構の大部分が保存できた点は、大きな成果であった。今後、内開発等の計画がなされないことを切に願うものである。

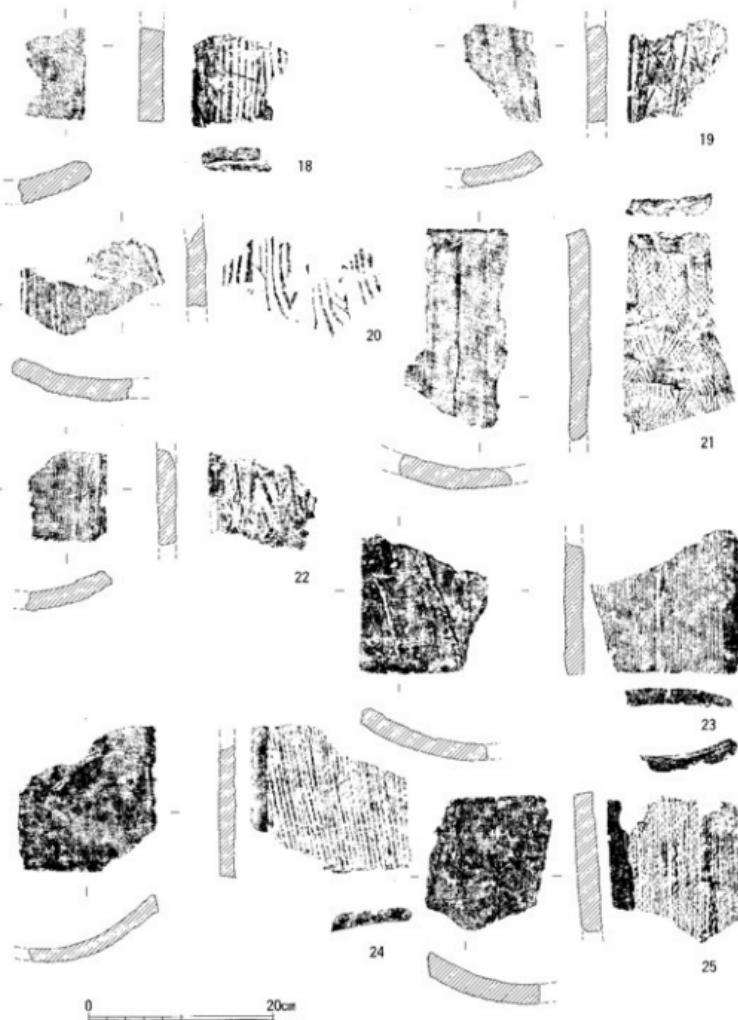


図-8 出土遺物

第3章 本郷遺跡

1. 調査に至る経過

1989年3月に、柏原市福祉課より、柏原市本郷3丁目所在の市福祉センターの建て替え工事の計画について、連絡があった。工事は1989年度に予定しており、工事を速かに進めるために、発掘調査の方法等について、事前に検討して欲しいというものであった。この連絡を受けて、柏原市教育委員会社会教育課では3月15日に、重機による試掘調査を実施した。試掘調査は、既存の建物を避け、調査対象地の北西隅近くで行った。しかし、調査可能な範囲が狭いため、地表下2mまでの調査に留めざるを得なかった。調査の結果、約40cmの厚さの表土下に黄灰色粗砂が認められ、その下層に青灰色粘土が認められた。青灰色粘土は遺物包含層の可能性も考えられたが、遺物は出土しなかった。

以上のように、試掘調査では遺構、遺物は認められなかったが、調査対象地の西側、南側では過去に遺構、遺物が検出されており、仮りに遺構、遺物が存在しない場合でも、地層、旧地形等を確認する必要があるため、発掘調査が必要であるとの回答を示した。

その後、4月20日に福祉課、建築管理室、社会教育課の三者で協議を行い、調査方法、費用負担区分等について検討した。社会教育課では鋼矢板の打ち込みを要望したが、費用、工期等の面で困難となり、本館予定地部分を素掘りで調査を実施し、費用については、社会教育課の公共事業関連調査の費用を充当することになった。

8月下旬に至り、建築管理室より、既存建物の撤去を9月15日までに完了するので、引き続き発掘調査に着手して欲しいと連絡があった。これを受け、社会教育課では9月18日から調査に着手することにし、湧水が激しい地点での素掘り調査であること、試掘調査で遺物、遺構が確認されていないことなどから、調査期間を5日間の予定にした。

調査は本館予定地内に10×20mの調査区を設定し、基礎工事の深度約120cmまでを調査、その後、一部を更に掘り下げて下層の調査を実施することにした。

9月18日、重機によって徐々に掘り下げていったが、やはり遺物包含層は認められなかったため、地表下120cmまでを重機によって掘削、その後、人力によって、若干の掘り下げ、精査を行ったが、遺構、遺物は認められなかった。

9月19日は豪雨で作業ができず、20日は排水作業で半日以上を費やした。午後、重機によつて更に掘り下げ、一部で遺物包含層と考えられる層を確認し、中～近世の洪水層を確認した。20日から21日にかけて西壁土層図を作成する一方、21日には再び掘り下げ、洪水層を追求した後、埋め戻して調査を終了した。湧水が激しい地点であり、事故等の危険性に配慮したため、応急の調査を実施したのみである。

2. 既往の調査

本郷遺跡では、これまでに11次にわたる発掘調査と、十数次の立会調査を実施しているが、湧水が激しく、遺跡深度が比較的深いため、十分な調査を実施できていない。その中から、主な調査をあげると1981-1次調査（図中①）、1983-1次調査（図中②）、1983-2次調査（図中③）、1984-2次調査（図中④）、1985-1次調査（図中⑤）、1988-1次調査（図中⑥）と今回の調査となる。

遺構としては、縄文時代晩期の埋甕（①地点）、弥生時代中期の溝状遺構（③地点）、庄内期の溝状遺構（①地点）、庄内期～布留期にかけての井戸（①地点）、6世紀から7世紀にかけての溝（④地点）のほか、中～近世の水田遺構などがある。遺物としては、縄文時代中期の深鉢（②地点）、古墳時代中期の須恵器、製塙土器（⑤地点）などが出土しており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが確認されている。

また、調査地では、いずれも砂、シルト、粘土の複雑な層がみられ、かっての大和川の氾濫の激しさを物語っている。

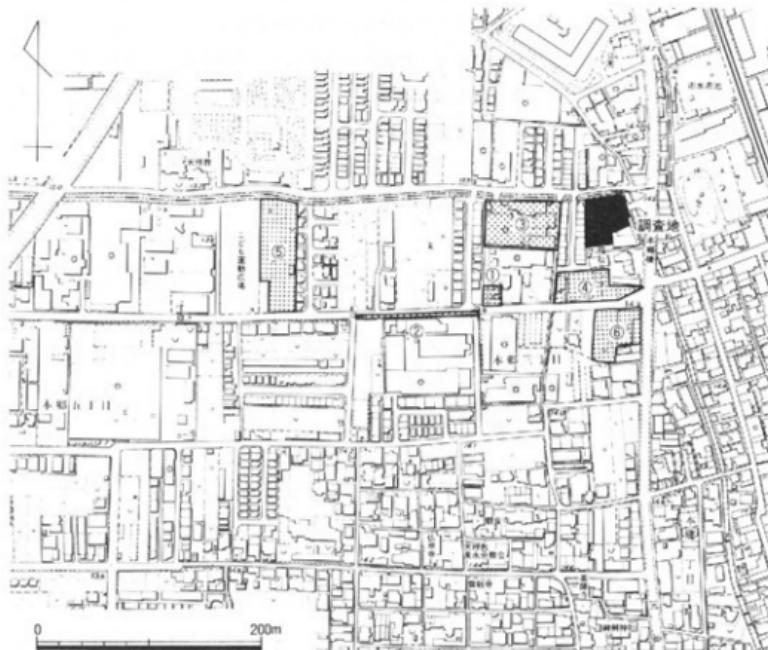


図-9 調査位置図

3. 調査成果

概要

本館予定地に、 $20m \times 10m$ の調査区を設定し、地表下約1.2mまで調査。その後、調査区中央で $10m \times 6m$ の範囲を地表下約3.2mまで掘り下げ、更にその北半を地表下約5mまで掘り下げた。調査は、一部を人力で掘り下げたが、大半は重機によって掘削し、その断面を確認したのみである。遺物は少量出土しているが、遺構は認められない。しかし、大和川の洪水と考えられる痕跡を確認している。

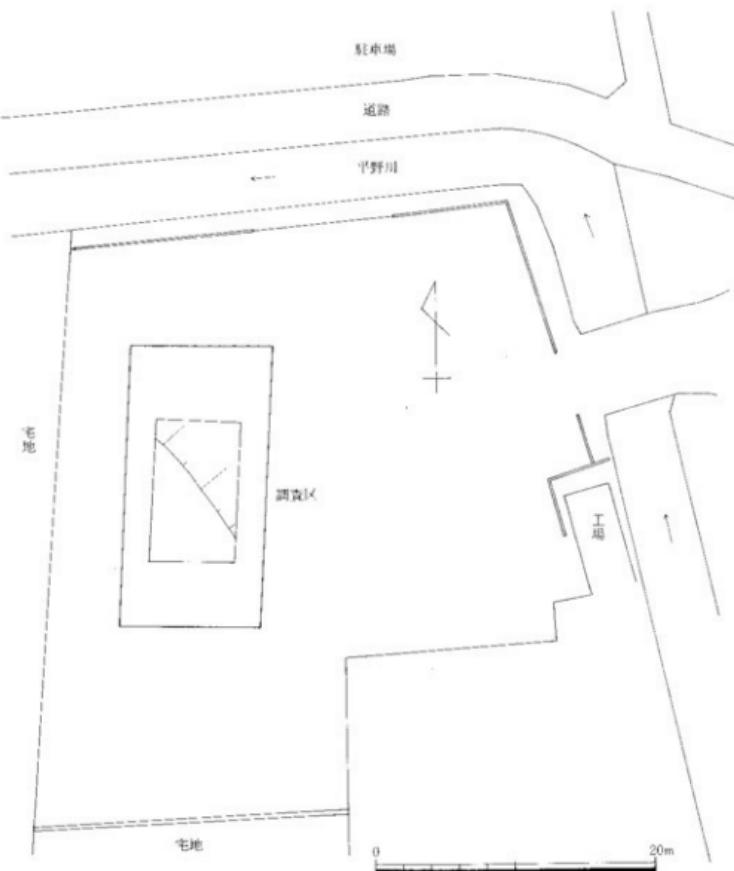


図-10 調査区位置図

層序

20~50cmの厚さの表土下に、第4層暗黄褐色細砂層がみられる。その下層に青灰色シルト、黄灰色粗砂がほぼ水平に堆積しており、これらの層は大和川の洪水とその後の水田に伴う層と考えられる。

一方、北端では暗黒灰色粘質土が北下がりに堆積しており、時期は不明であるが、落ち込み状を呈していると考えられる。

その中間には、第7層灰褐色細砂と第8層灰白色粗砂が畦畔状に盛り上がってみられる。幅は240cm、高さは35cmを測る。平面では確認できていないが、砂を人為的に積み上げたものと考えられ、畦畔ではなく、島畑の可能性が考えられる。

その下層には、第9層灰色細砂が溝状にみられ、第10層暗青灰色シルトによる畦畔の北側の側溝であった可能性が考えられる。第6層黄灰色粗砂と第10層暗青灰色シルトは一部で不整合面をなしており、第6層黄灰色粗砂をもたらした洪水の後、その砂の一部を畦畔上に積み上げ、島畑とした可能性を考えておきたい。

しかし、時期については全く不明である。

更に下層には第11層青灰色粘質土が、ほぼ水平に堆積し、その下層には第13層黒灰色粘質土が堆積する。黒灰色粘質土は南へ向かうにつれて、厚くなっている、甌生土器、土師器、須恵器、埴輪の小片が数点出土しており、遺物包含層と考えられる。今回の調査地から約50m南側の1984-2次調査(④地点)の第10層灰色粘土に対応する層と考えられる。灰色粘土からは、弥生時代後期~7世紀の遺物が出土しており、時期的にも一致する。灰色粘土はT.P.13.2m~14.2mに堆積しており、黒灰色粘質土はT.P.13.3~13.6mに堆積していることからも同一の包含層と考えられる。すなわち、北へ向かうにつれて包含層は薄くなり、遺物量も少なくなるようである。

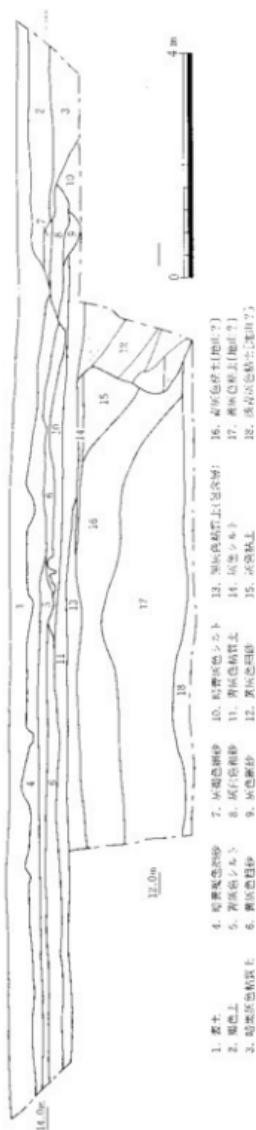


図-11 西壁十層図

その下層には灰色シルト、灰色粘土、青灰色粘土、黄灰色粘土、淡青灰色粘土の堆積がみられる。いずれも北下がりの層をなしている。第15層灰色粘土は遺物包含層の可能性が考えられるが、遺物は出土していない。第16層青灰色粘土以下は、地山と推定される。これが地山であるならば最も高い地点でT.P.13.4mを測り、北側で大きく落ち込んでいることになる。1984-2次調査では、T.P.13.3mで地山と考えられる淡黄褐色粘質土を確認しており、今回の調査地から南にかけては、地山面がほぼ一定であると考えられる。おそらく、淡黄褐色粘質土と今回の調査地の第17層黄灰色粘土が対応するものと考えられる。

また、第14層灰色シルトを切り込んだ第12層黄灰色細砂が注目される。黄灰色細砂は灰色粘土、青灰色粘土を抉り込むように堆積しており、明瞭な縞状層が認められることから、洪水に伴う砂の堆積と考えられる。黄灰色細砂は調査区の南東から北西にかけてみられ、北東方向に傾斜している。おそらく、調査区は南東から北西方向への洪水に伴う激しい流水の左岸にあたるのであろう。最後の掘り下げによって、黄灰色細砂の厚さは3m以上であることを確認している。また、黄灰色細砂からは土師器、瓦器の小片が出土しており、この洪水が13世紀以降のものであることを示している。

遺物

1は弥生時代後期の甕口縁部。口縁はくの字状に外反する。体部外面は左下がりの平行叩き、口縁部はヨコナデ調整。黒灰色粘質土から出土。

2は円筒埴輪。断面台形の凸帯を有する。内面ナデ、凸帯はヨコナデ調整。黒灰色粘質土から出土。古墳時代中期～後期のものであろう。

3は土師器の小形の甕。口径7.4cm。口縁部は外反し、体部との境は明瞭である。体部外面はナデ、内面は板ナデ、口縁部はヨコナデ調整。黄灰色細砂から出土し、表面は磨滅している。古墳時代後期のものであろう。

4.まとめ

今回の調査成果だけでなく、既往の調査成果も参考に、本郷遺跡の位置付けを行って、まとめてみたい。

既往の調査成果から、縄文時代～古墳時代前期の遺物、遺構は、①～③地点を中心にみられるが、遺物量は少なく、小規模な集落が移動しながら存在したものと思われる。縄文時代の遺構面はT.P.12m前後、弥生時代～古墳時代前期の遺構面はT.P.12.5m前後である。



図-12 出土遺物

古墳時代中期から後期にかけては調査地全域で遺物が出土しているが、遺構は確認できていない。しかも、埴輪が多く、古墳が数基存在したものと思える。おそらく、一帯が墓域となっていたのであろう。⑤地点出土の完形の須恵器杯蓋、高杯も、古墳に供獻されたものではないだろうか。

古墳時代後期末から奈良時代にかけて、再び集落が存在したようであるが、やはり遺物の量は少ない。遺構面はT.P.13m前後である。

中世になると、小規模な集落が存在すると共に、広範囲に水田が存在したようである。この水田は近世から現在まで引き継がれるが、集落は近辺には存在せず、おそらく約300m南方に位置する現集落に重なっているのであろう。大和川付け替え後は、安定した水田景観を呈していたことであろう。そして、昭和になり、工場、住宅等が建てられるようになったものである。

これまでの調査によって、地山が確認されているのは、④地点と今回の調査地のみである。地山はT.P.13.3m前後の高さである。おそらく、南から北へ舌状にのびる台地の稜線上に位置するのであろう。この台地の東縁に沿って平野川（了意川）が北流していたと考えられる。現在の平野川は調査地で屈曲し、西流するが、本来の川筋に現在も道が残っており、更に北流していたものと考えられる。調査地で確認された洪水の痕跡も、この平野川の前身である旧大和川によるものと思われる。

一方、①～③地点ではT.P.11m前後まで調査しているにもかかわらず、地山は検出されていない。従って、かなりの傾斜で西方へ下がっていたものと考えられる。また、⑥地点でもT.P.13m前後まで掘削したが地山に至っておらず、舌状台地の地形も複雑なようである。これまでの調査成果から考えると、今回の調査地周辺にも、縄文時代から弥生時代の遺構が存在したのではないかと推定される。おそらく、後世の洪水や削平によって消滅したのであろう。①～③地点では、埋没したために、遺構が残っていたと考えられる。このような、洪水や削平の繰り返しによって、調査地周辺と西方との比高差は、古墳時代頃にはあまりみられなくなり、中世には完全に同一レベルとなっている。今後、更に調査を重ねることによって、遺跡の範囲を明確にしたいと考えている。

参考文献

柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1981年度』1982（①地点）

柏原市教育委員会『柏原市所在遺跡発掘調査概報－大県・田辺・本郷遺跡－』1984（②・③地点）

柏原市教育委員会『本郷遺跡・王手山遺跡－マンション建設に伴う－』1985（④地点）

柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1985年度』1986（⑤地点）

図 版



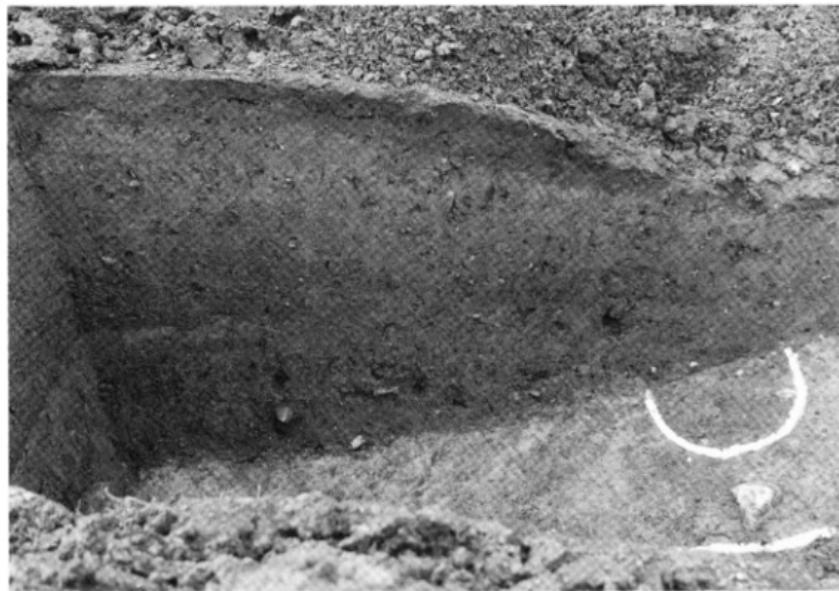
全景（東から）



上段遺構（東から）



下段遺構（東から）



下段土層（南から）



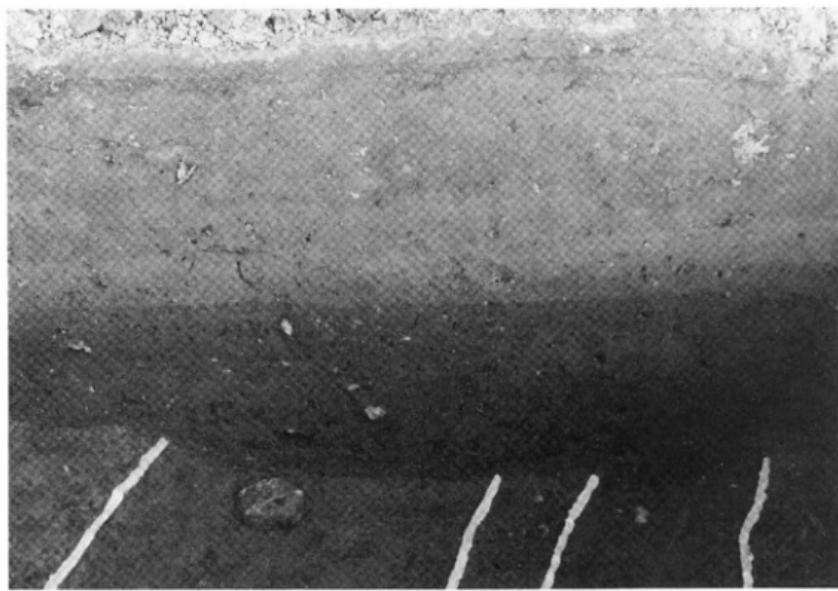
全景（北から）



全景（南から）



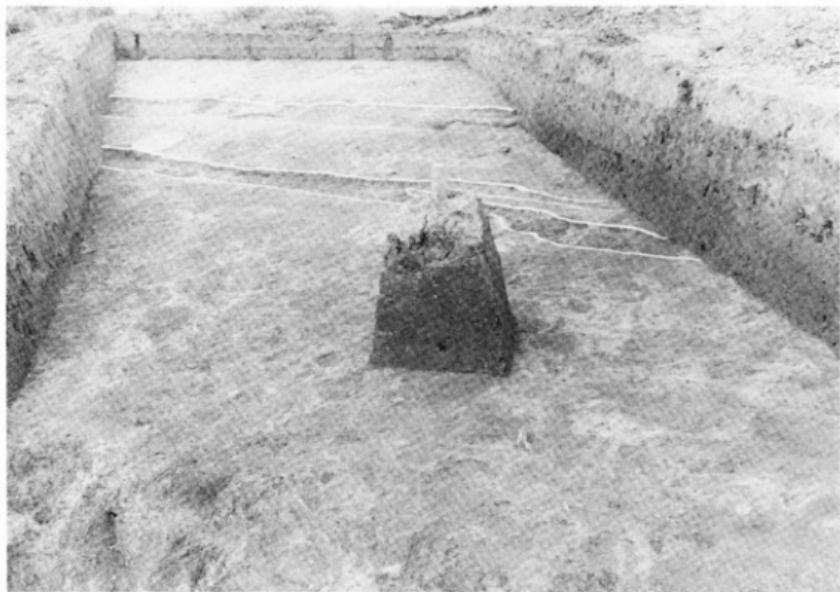
全景（北から）



土層（西から）



全景（東から）



全景（西から）



溝一・2 (南から)



溝一・2 (北から)



全景（北から）



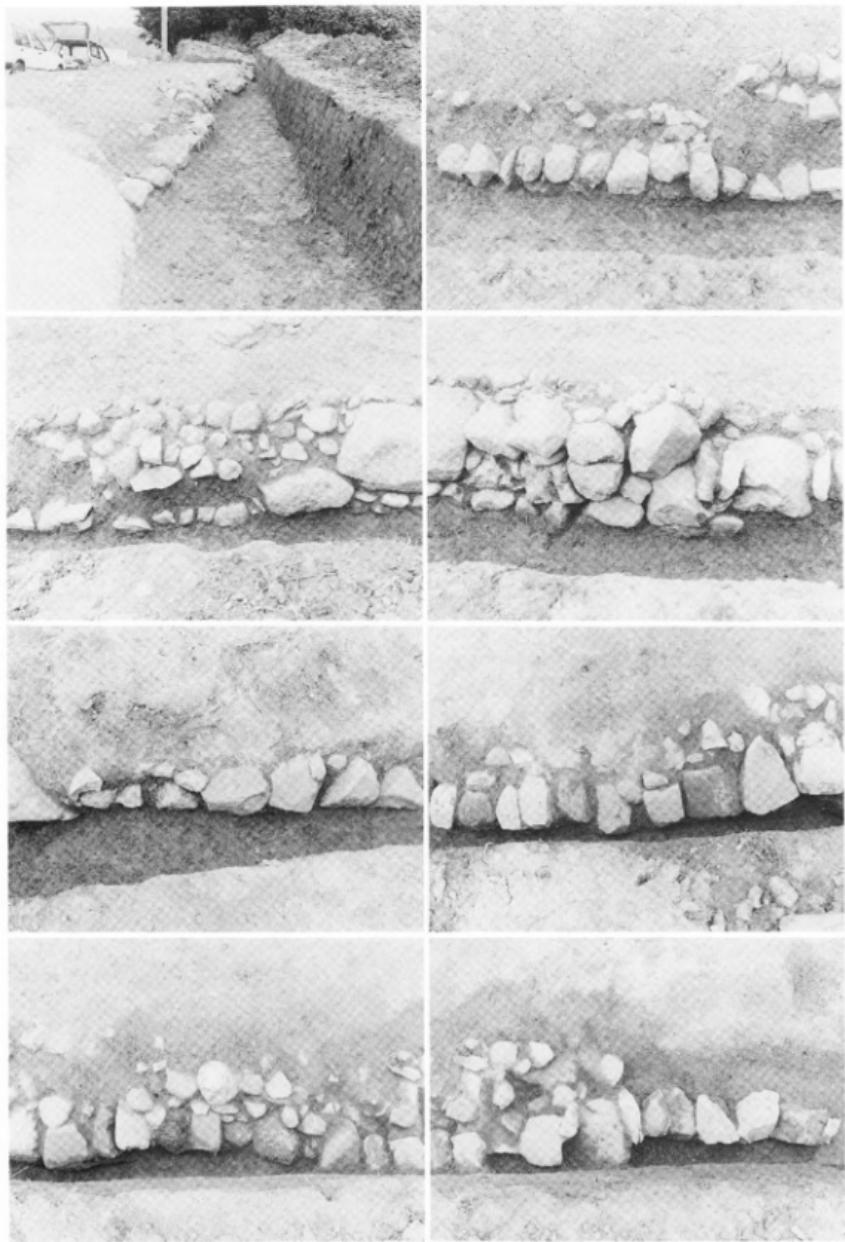
石積み遺構（南から）



石積み遺構（北から）



石積み遺構（南から）



石積み造構細部



下層遺構（東から）



下層遺構（北から）



下層遺構（南から）



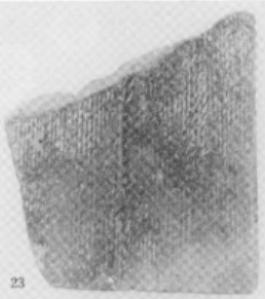
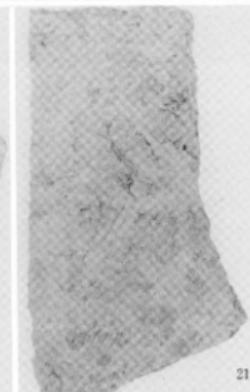
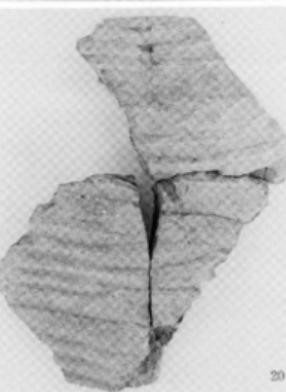
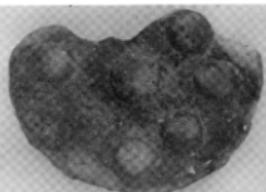
ピットー20（東から）



溝-5（北から）



溝-5（東から）





上層全景（北から）



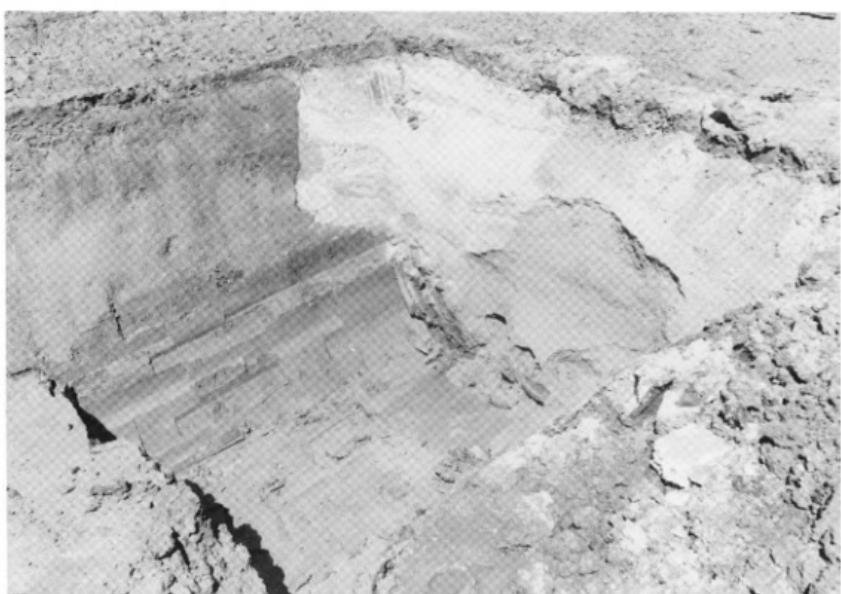
上層全景（南から）



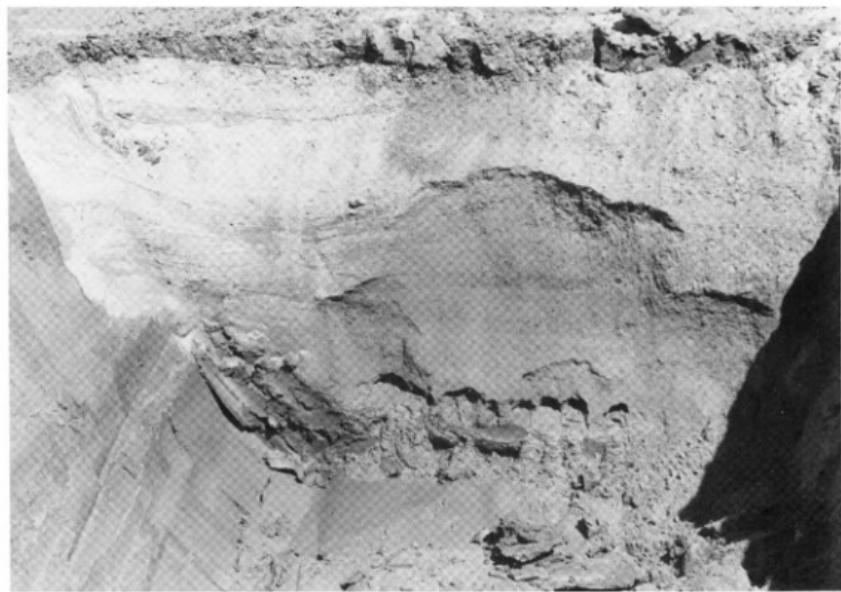
中層全景（南から）



中層全景（南東から）



下層全景（南東から）



下層北壁（南から）

高井田遺跡・本郷遺跡

—1989年度公共事業に伴う—

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内5133

発行年月日 平成2年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

